

グリム童話の世界  
(予告編)

はじめに

さて、新しい「作品」としては、有名な『グリム童話の世界』（シンデレラと白雪姫その他）をはじめ、『日本の昔話の世界』（浦島太郎と桃太郎その他）などを予定していますが、これらの「作品の完成」にはまだまだ「時間」がかかりますので、今回は、取り敢えず、有名な「赤ずきん」と「ジャックと豆の木」それに「ヘンゼルとグレーテル」という作品の「本文」だけであり、それゆえ、「作品」としては「説明」（解説）などを全く欠いた「未完成な状態」ではあるが、ただ、これからの新しい「童話や昔話」の作品というのは、大体こういう感じになるということであり、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

令和元年八年吉日（予告編）

如月翔悟

目次

はじめに

一、 赤ずきん

二、 ジャックと豆の木

三、 ヘンゼルとグレーテル

※ 参考文献

赤ずきん

## 赤ずきん

### 一、名の由来とお使い……

むかしむかし、あるところにちいさな愛くるしい女の子がいました。この子ときたら、ほんのちよつと見ただけの人からもかわいがれたくらいですが、この子を誰よりも一番かわいがっていたのは、何と言つても、この子のおばあさんであり、この子に何をしてあげたらよいのかと困るほどのかわいがりかたでした。——ある時、おばあさんは、赤いピロイドでこの子にずきんをこしらえてやりました。すると、それがまたこの子によく似合つて、それからもうほかのものはかぶらなくなったので、みんなはこの子のことを、赤ずきん、赤ずきん、と言うようになったのです。

ある日のこと、お母さんは、この子を呼んで言いました。「……さあ、おいで、赤ずきん、ここにね、大きな上等のお菓子が一つと、ぶどう酒が一本あるの。これを、おばあさんのところへ持つてつてちょうだい。おばあさんは、ご病気で弱つていらつしやるが、これを上げると、きつと元気になるわよ。それでは、暑くならないうちに行つてらつしやい。それから、外へ出たら気をつけて、お行儀よくしてね、やたらに、知らない横道へ行つたりなんかしないですよ。そんなことをして、転んだりしたら、せつかくの瓶はこわれるし、おばあさんに上げるものがなくなるからね。それから、おばあさんのお部屋に入つたら、まず、お早うございます、を言うのを忘れずにね。入つてすぐにお部屋の中をきよる見まわしたりなんかしないでね」と言うと、「……そんなこと、あたし、ちゃんと出来るわよ」と、赤ずきんは、お母さんにそう言つて、指切りをしました。

### 二、途中、おおかみに出会う。

ところで、そのおばあさんは、村から三十分ぐらいかかる森の中に住んでいました。そして、赤ずきんが、いよいよその森にさしかかったとき、ばつたりと出くわしたのは、おおかみでした。でも、赤ずきんは、おおかみというものがどんな悪いことをする動物だか知らなかったので、おおかみをこわいとは思いませんでした。そして、「……こんにちは、赤ずきん」と、おおかみが声をかけました。すると、赤ずきんは、「……まあ、こんにちは、おおかみさん」と明るく応えるのでした。おおかみは、「……どこへ行くの、こんなに早くから、赤ずきん」と聞くと、赤ずきんは、「……おばあさまとこよ」と答えるのでした。おおかみは、「……なにもつてるの、まえかけの下に」と訊ねるので、赤ずきんは、「……お菓子とぶどう酒よ。きのう焼いたの。これ、病気で弱つてるおばあさまにいいのよ。力がつくのよ」と応えると、おおかみは、「……どこ？ おばあさんのおうちは」と訊くのでした。すると、赤ずきんは、「……森のずうつと奥のほう、まだたつぷり十五分はかかるわ。大きなかしわの木が三本あって、その下におばあさまのおうちがあるのよ。下には、はしばみの生垣があるから、すぐにわかるわ」と、素直に答えるのでした。

### 三、きれいな花を集めに森の奥へ……

おおかみは、心の中で考えました。「……若い、やわらかそうな小娘だ、こいつは脂肪がのって、おいしそうだ。ばあさまよりは、ずっと味がよかろう。ついでに両方一緒に、ぱくりとやる算段をしなきゃならん」と。そこで、おおかみは、しばらくの間、赤ずきんとならんで歩きながら、道々こう話しました。「……ねえ、赤ずきん、ちよいと見てごらんよ。そこいらじゆうに咲いてるきれいな花をさ。どうしてまわりを見ないの？ 小鳥があんなに愛らしく歌をうたっているのに、赤ずきんは、少しも聞こうともしないじゃないか。まるで学校へでも行くように、わき目もふらずに歩いているじゃないの、そとは、森の中はこんなに浮々とおもしろいになあ」と言うのでした。

そう言われて、赤ずきんは目を上げました。すると、お日さまの光が、木と木の茂った中からまれて、あっちでもこっちでも日の光がたのしそうにダンスをおどったり、また、どこもかしこもきれいな花がいっぱい咲いているのが目に入りました。そこで、「……あたし、おばあさまに、とりたての花を花束にしておみやげに上げたら、おばあさまは、きつとお喜びになることよ。まだ朝早いんですもの、だいじょうぶ、時間までに行かれるわ」と、こう考えて、森のわき道へと入り込んで、いろいろの花をさがし始めました。そして、一つ花を摘むと、その先に、もつときれいな花があるのじゃないか、という気がして、花から花を追いかけて、だんだん森の奥へ奥へと入って行きました。

四、一方、おおかみは、……

ところが、その間に、すきをねらって、おおかみは、すたこらすたこら、おばあさんのお家へとかけて行きました。そして、とんとん、戸を叩きました。「……おや、どなた」と聞くと、「……赤ずきんよ。お菓子とぶどう酒を、お見舞いに持って来たのよ。開けてちょうだい」と言うので、「……把手を押しておくれ。おばあさんは病気でよわっていて、起きられないからね」と言うのでした。おおかみは、把手を押すと、戸は、ぼんと開き、おおかみは、すぐと入って行って、何にも言わずに、いきなりおばあさんの寝ているところへ行って、あんぐりひと口に、おばあさんを飲み込みました。それから、おばあさんの着物を着て、おばあさんのずきんをかぶって、おばあさんの寝床にごろりと寝て、カーテンを引いておきました。……

五、おばあさんの家へと行くと、

一方、赤ずきんは、お花を集めるのに夢中で、森じゆうをかけたまわっていました。そうして、もう集めるだけ集めて、このうえ持ちきれないほどになった時、おばあさんのことを思い出して、またいつもの道にもどりました。おばあさんのうちへ来てみると、戸が開いたままになっているので、変だと思いました。すると、何かがいつもと変わって見えたので、「……変だわ、どうしたのでしょうか。今日はなんだか胸がわくわくして気味の悪いこと。おばあさんのところへ来れば、いつだって楽しいのに」と、思いながら、大きな声で、「……おはようございます」と、呼んでみました。でも、返事はありませんでした。そこで、寝床のところへ行って、カーテンを開けてみました。すると、そこにおばあさんは、横になっていましたが、ずきんをすっぽり目まで下げて、何だかいつ

もと様子が変わっていました。「……あら、おばあさん、なんて大きなお耳をしているの」と聞くと、「……おまえの音が、よくきこえるようにさ」と答え、「……あら、おばあさん、なんて大きなお目めしているの」と聞くと、「……おまえさん、なんて大きなお手でしているの」と聞くと、「……おまえが、よくつかめるようにさ」と答え、「……でも、おばあさん、まあ、なんて気味の悪い大きなお口なこと」と言うのと、「……おまえを食べるにいいようにさ」と、こう言うが早いのか、おおかみは、いきなり寢床から飛び出して、かわいそうに赤ずきんを、ただひと口にあんぐり食べてしまいました。これで、したたかお腹をふくらませると、おおかみはまた寢床にもぐって、ながながと寝そべって休みました。やがて、ものすごい音を立てて、いびきをかき出しました。

#### 六、かりゆうどが家の中へと入ると、

ちようど、その時、かりゆうどが表を通りかかって、はてなと思つて立ちどまりました。「……おばあさんが、すごいいびきで寝ているが変だな。どれ、何か変わったことがあるんじゃないか、見てやらさばなるまい」と。そこで中へ入ってみて、寢床のところへ行つてみると、おおかみが横になっていました。「……やや、こんちきしょうめ、とうとう見つけたぞ。長い間、きさまを探していたんだ」と言つて、そこで、かりゆうどは、すぐに鉄砲を向けました。しかし、ふと、ことによると、おおかみのやつ、おばあさんをそのまま飲み込んでいるかも知れないし、まだ中で生きているかも知れないぞ、と思いつきました。そこで鉄砲をうつことはやめにして、そのかわり、はさみを出して、眠っているおおかみのお腹をじよきじよき切り始めました。ふたバサミ入れると、もう赤いずきんがちらと見えました。もうふたバサミ入れると、女の子が飛び出してきて、「……まあ、あたし、どんなにびつくりしたでしょう。おおかみのお腹の中の、それは暗いったらなかつたわ」と、言いました。——やがて、おばあさんも、まだ生きていて、這い出して来ましたが、もう弱つて虫の息になっていました。赤ずきんは、さつそく、大きな石ころを、いくつもいくつも運んできて、おおかみのお腹の中にいっぱい詰めました。やがて、目が覚めて、おおかみが飛び出そうとすると、石の重みで倒れて死んでしまいました。——さあ、三人は大喜びで、かりゆうどは、おおかみの毛皮をはいで、家へ持つて帰りました。また、おばあさんは、赤ずきんの持つて来たお菓子を食べ、また、ぶどう酒を飲みました。それで、すっかり元氣を取り返しました。そして、赤ずきんは、「……お母さんにいけなと言われた時には、自分ひとりで勝手に森のわき道へ入りこむようなことは、もう二度と再びしないわ」と、そう思うのでした。(完)

#### 七、続きのお話……

ある時、赤ずきんは、前と同じように、年を取ったおばあさんのところへお菓子を持つて行くと、別のおおかみが話しかけてきて、赤ずきんを往来から横道へと連れ込もうとしたのです。けれども、赤ずきんは用心深く、わき目も振らずにすたすた歩いて行つて、おばあさんに、「……いま途中でおおかみに会ったら、おおかみはご機嫌ようつて挨拶した

けれど、悪巧みのあることはぎよろりと見た目で知れたのよ」と、おばあさんにお話をしてから、「……あれがもし往来でなかつたら、おおかみはあたしを食べちまったでしょうね」と言うのでした。すると、おばあさんは、「……おいで！」と言い、「……戸へ錠を下ろして、おおかみが入れないようにしてやりましょう」と、おばあさんは言うのでした。やがて、まもなく、おおかみがとんとんと戸をたたいて、「……開けてちょうだいな、おばあさん、おばあさまにお菓子もつてきたのよ」と、呼び立てました。けれども、ふたりは、うんともすんとも言わず、戸も開けませんでした。すると、ごましお頭の悪いおおかみは、二、三べん、しのび足で家のまわりをぐるぐる歩いてみましたが、とうとう屋根の上へと跳び上がりました。それは、赤ずきんが夕方うちへ帰るまで待っていて、出て来たら、あとからそうとつつけて行って、暗がりです赤ずきんを食べてしまうつもりなのです。ところが、おばあさんは、おおかみのそのたくらみに気がつきました。

そこで、「……赤ずきんや、手おけを持って来ておくれ。昨日ね、あばあさんは腸詰め（ソーセージ）をこしらえたのさ。おまえ、あの腸詰め（ソーセージ）をゆでた水を、この水ぶねの中へ入れておくれな」と、言いつけました。赤ずきんは、何べんも何べんもその水を運んで、とうとう大きな大きな水ぶねを一杯にしました。そうすると、腸詰め（ソーセージ）のいい匂いが、おおかみの鼻の穴へ、ぶんぶん入って来ました。

おおかみは、鼻をひこひこさせて、下をのぞいてみました。そのうちに、首をあんまり伸ばし過ぎたので、身体をささえていられなくなつて、ずるずる、すべり出しました。そして、ずるずる、ずるずる、屋根からすべつて、ちょうどその大きな水ぶねの中へすべり落ちて、おぼれ死んでしまいました。……一方、赤ずきんは、いそいそと、うちへ帰って行きましたが、もちろん、その途中、誰にもどうもされることもなかったのです。（完）

\*

\*



ジャックと豆の木

## ジャックと豆の木

### 一、母親とジャックの暮らしぶり

昔々、イギリスの、アルフレッド大王の時代のことでしたが、ロンドンの都から遠く離れた田舎の小屋に、やもめの女の人が、小さい息子の「ジャック」という子と寂しく暮らしていました。それは、もうかけがえのない「一人息子」でしたし、それに、随分のんきで、ずぼらで、怠け者でしたが、ほんとうは気だてのやさしい子でしたから、母親は、明けても暮れても、「ジャック、ジャック」と言つて、それこそ目の中に入れてしまいたいくらいに可愛がつて、何にも仕事はさせず、ただ遊ばせておきました。

こんなふうには、のらくら息子をかかえた上に、このやもめの女の人は、どういうものか運が悪くて、年々ものが足りなくなるばかりで、ある年の冬には、もう手まわりの道具や衣類まで売ってしまったて、手に入れたお金も（手内職などをして）わずかばかり稼いで貯めたお金も、すべてきれいに使つてしまい、とうとう家のなかでどうにかお金になるものと言つたら、たった一頭残つた「牝牛」だけになつてしまつたのです。

そこで、ある日、母親は、息子の「ジャック」を呼んで、「……ほんとうに、お母さんは、自分の身体を半分持つて行かれるほど辛いけれど、いよいよあの牝牛を手離さなければならぬことになつたのだよ。お前、ご苦労だけれども、市場まで牛をつれて行つて、いい人を見つけて、なるべく高く売つて来ておくれな」と言うのでした。——そこで、息子のジャックは、その「牝牛」をひっぱつて（市場へと）出かけるのでした。……

### 二、牝牛と豆の袋との交換。

さて、しばらく歩いて行くと、途の向こうから「肉屋の親方」がやつて来て、親方は、「……これこれ坊や、牝牛なんかひっぱつて、どこへ行くのだい？」と声をかけるので、ジャックは、「……売りに行くんだよ」と答えるのでした。すると、親方は、「……ふうん」と言いながら、片手に持つた帽子を振つて見せました。がさがさ音がするので、気がついて、ジャックは、帽子の中をふと覗いて見ると、奇妙な形をした豆が「袋の中」からちらちら見えしました。「……やあ、きれいな豆だなあ」と、ジャックはそう思つて、何だかむやみとそれが欲しくなりました。その様子を、相手の男は、すぐにも見つけてしまいましたから、この少し足りない子供を、うまくひっかけてやろうと思つて、わざと袋の口を開けて見せて、「……坊や、これが欲しいんだらう」と言うのでした。

ジャックは、そう言われて、ニコニコ顔になると、親方はもつたらしく首を振つて、「……いけない、いけない、こりやあ不思議な魔法の豆さ。どうしてただでは上げられないよ。どうだ、その牝牛と取り替えっこしようかね」と言うので、ジャックは、その男の言うなりに、牝牛と豆の袋とを取り替えっこしました。そして、お互いにこれはとんだ儲けものをしたと思つて、ほくほくしながら別れました。

### 三、家へと帰ると、母親は……

ジャックは、豆の袋を抱えて、家まで飛んで帰りました。家へ入るか入らぬうちに、ジャックは、「……お母さん、今日はほんとにうまく行ったよ」と、いきなりそう言って、大得意で、牛と豆の『取り替えっこ』の話をしました。ところが、母親は、それを聞いて喜ぶどころか、あべこべにひどく叱りました。「……まあ、何という馬鹿なことをしてくれたのだね。ほんとに呆れてしまう。こんなつまらない、えんどう豆の袋なんかにつられて、大事な牝牛一頭を元も子もなくしてしまうなんて、神さま、まあ、この馬鹿な子をどうしましょう」と言いながら、母親はぶんぶん怒って、いまいまして、窓の外へ、袋の中の豆を残らずすべて投げ捨ててしまいました。そして、つくづく情けなさそうに、しくしくと泣き出しました。——きつと喜んでもらえると思っていたのに、あべこべに、生まれて初めて、お母さんのこんなに怒った顔を見たので、ジャックはびっくりして、自分も悲しくなりました。そして、何にも食べるものがないので、お腹の空いたままで、その晩は、早くからころんと寝てしまいました。

#### 四、翌朝、大きな豆の木を見て、……

その翌る朝、ジャックは目を覚まして、もう夜が開けたのに、何だか暗いなあとあって、ふと窓の外を見ました。するとどうでしょう、きのう庭に投げ捨てた「豆の種子」から、芽が生えて、ひと晩のうちに、太い丈夫そうな「豆の大木」が見上げるほど高く伸びて、それこそ庭いっぱいうつそうと茂っているではありませんか。

びっくりして飛び起きて、すぐにと庭へ下りてみると、高いとあって、その豆の木は、それこそ、途方も知れない高さに、空の上までも伸びていました。それは、つると葉とが絡み合って、空の中をどんと突き抜けて、まるで豆の木のはしごのように、しっかりと立っていました。「……あれを伝わって、てっぺんまで登って行ったら、全体どこまで行けるかしら」と、そう思って、ジャックは、すぐにもはしごを登り始めました。だんだん登って行くうち、ジャックの家は、ずんずん、ずんずん、目の下に小さくなって行き、そして、いつのまにか見えなくなっていました。それでもまだてっぺんには来ていませんでした。ジャックは、いったいどこまで行くのかと思って、すこし気味が悪くなりましたが、それでも一生懸命にはしごにしがみついて登って行きました。あんまり高く登ったので、目はくらむし、手も足もくたびれきつてもうしびれて、ふらふらになりかけた頃、やつとてっぺんに登り着きました。

#### 五、雲の上の国と一人の妖女

さて、ジャックは、まず最初、そこらを見まわしてみると、そこは不思議な国で、青と茂った静かな森がありました。また、美しい花の咲いている草原もありました。そして、水晶のようにきれいな水の流れている川もありました。こんな高い空の上に、こんなきれいな国があるうとは、思ってもいませんでしたから、ジャックはあつけにとられて、ただきよとんとしていました。——いつの間にか、ふと、赤い角ずきんをかぶった、妙な顔のおばあさんが、どこから出て来たか、ふと目の前に現れました。ジャックは、不思議そうに、この妙な顔をしたおばあさんを見つめました。おばあさんは、でも、やさしい声で

言いました。「……そんなにびっくりしないでもいいのだよ。わたしは、お前さんたち一家の者を守ってあげている妖女なのだけれど、この五、六年の間というものは、悪い魔ものために、魔法で縛られていて、お前さんたちを助けて上げることができなかったのさ。だが、今度やつと魔法がとけたから、これからは思いのままに、助けて上げられるだろうよ」と言うのでした。……

だしぬけに、こんなことを言われて、ジャックは、なおさらあつげにとられてしまいました。そのぼかんとした顔を、妖女は面白そうに眺めながら、そのわけを詳しく話し出しました。それをかいつまんで言うと、まあこんなものでした。「……ここからそう遠くない所に、恐ろしい鬼の大男が住みかに行っているお城のような家がある。じつはその鬼が、昔、そのお城に住んでいたお前のお父さんを殺して、城といっしょにその持っていたお宝残らず奪ってしまったものだから、お前のうちは、すっかり貧乏になってしまったのさ。そうしてお前も、赤ちゃんの時から、かわいそうに、お前のお母さんのふところに抱かれたまま、下界に落ちぶれて、情けない暮らしをするようになったのだよ。だから、もう一度、その宝を取り返して、悪いその鬼をひどい目に遇わしてやるのが、お前の役目なのだよ」と言うのでした。

さて、こういうふうに言い聞かされると、ぐうたらなジャックの心も、ぴんと張って来ました。知らないお父さんのことがなつかしくなつて、どうしてもこの鬼を懲らしめて、かすめられた宝を取り返さなくてはならないと思いました。そう思うと、とても勇ましい気になつて、お腹の空いていることもくたびれていることも、きれいに忘れてしまいました。そこで、妖女にお礼を言つて別れると、さっそく、鬼の住んでいるお城に向かつて急いで行きました。……

#### 五、お城に住む人喰い鬼の大男

やがて、お日様が西に沈む頃、ジャックは、なるほどお城のように大きな家の前に来ました。——そこで、まず、とんとんと門をたたくと、なかから、目の一つしかない、鬼のお上さんが出て来ました。気味の悪い顔に似合わず、鬼のお上さんは、ジャックのひもじそうな様子を見て、かわいそうに思いました。が、さも困つたように首をふつて、「……いけない、いけない。気の毒だけれど、泊めて上げることはできないよ。ここは、人喰い鬼の家だから、見つかると、晩のごはんのかわりにすぐ食べられてしまうからね」と言うのでした。ジャックは、「……どうか、おばさん、知られないようにして泊めてくださいよ。ぼくはもうくたびれて、ひと足も歩けないんです」と、頼むように言いました。すると、お上さんは、「……仕方のない子だね。じゃあ今夜だけ泊めてあげるから、朝になったら、すぐお帰りよ」と言うのでした。

こう言っている最中、にわかにはずしん、ずしんと地響きするほど大きな足音が聞こえて来ました。それは主人の人喰い鬼が、もう外から帰つて来たのです。鬼のお上さんは、大あわてにあわてて、ジャックを暖炉の中に隠してしまいました。

鬼は、部屋の中に入ると、いきなり、ふうと鼻を鳴らしながら、誰だつてびっくりして震え上がるような大声で、「……フン、フン、フン、イギリス人の香がするぞ。生きていようが死んでいよが、骨ごとひいてパンにしようぞ」と、言いました。すると、お上さん

が、「……いいえ、それはあなたがつかまえて、土の牢ろうに入れてある人たちの匂いでしよう」と言いました。けれども、鬼の大男は、まだきよるきよるそこらを見まわして、鼻をくんくんやっています。でも、どうしてもジャックを見つけないことが出来ませんでした。とうとうあきらめて、鬼は、椅子いすの上に腰を下ろしました。そして、がつがつ、がぶがぶ、食べたり飲んだり始めました。そつとジャックがのぞいて見てみると、それはあとからあとから、いつおしまいになるかと思うほどかっこむので、ジャックは、目ばかりまわくしていました。さて、たらふく食べて飲んだあげく、お上かみさんに、「……おい、にわとりをつれてこい」と言いつけました。それは、不思議なめんどりでした。テーブルの上のせて、鬼が、「生め」と言いますと、すぐ金の卵を一つ生みました。鬼がまた、「生め」と言いますと、また一つ、金の卵を生みました。「……やあ、ずいぶん、得なにわとりだな。お父さんのお宝というのは、きつとこれに違いない」と、下からそつと眺めながら、ジャックはそう思いました。

さて、鬼は面白がつて、あとからあとから、いくつもいくつも金の卵を生ましているうちに、お腹が張つてきて眠たくなつたと見えて、ぐすぐすと壁かべの動くほどすごい大いびきを立てながら、ぐつぐつと寝込んでしまいました。——ジャックは、鬼のすつかり眠入つたのを見すまして、ちようど鬼のお上かみさんが台所へ行っているのを幸いに、そつと暖炉だんろの中から抜け出しました。そして、テーブルの上のめんどりを、ちよろり小わきにかかえて、すたこらお城を出て行きました。

それから、どんどん、どんどん、駆けだして行って、豆の木のはしごのかかっている所まで来ると、するするをつたわつておりて、うちへ帰りました。——ジャックのお母さんは、息子が、鬼か魔女にでもとられたのではないかと心配していると、無事でひよつこり帰つて来たので、とても大騒ぎして喜びました。それから、ジャックの持つて帰つた、金の卵を生むにわとりのお陰で、親子はお金持ちになり、また、幸せにもなりました。

#### 六、再び、大きな豆まめの木を登る。

しばらくすると、ジャックは、また、もう一度、空の上のお城に行つてみたくなりました。そこで、今度は、すつかり先せんと違った風をして、ある日、豆の木のはしごを、またするすると登つて行きました。鬼のお城に行つて、門をたたくと、鬼のお上かみさんが出てきました。ジャックが、また悲しそうに、泊めてもらいたいと言つて、頼みますと、お上かみさんは、まさかジャックとは気がつかないようでしたが、それでも手をふつて、「……いけない、いけない。この前も、お前と同様な貧乏らしい子供を泊めて、主人の大事なにわとりを、ちよつくら持つて行かれた。それからは毎晩、そのことを言い出して、わたしが、叱られ通しに叱られているじゃないか。またもあんなひどい目に合うのはこりごりだよ」と言うのでした。

それでも、ジャックは、しつこく頼んで、とうとう中へ入れてもらいました。そうするうち、大男が帰つて来て、また、そこらをくんくん嗅いでまわりましたが、ジャックは、あかがねの箱の中に隠れているので、どうしても見つかりませんでした。

大男は、この前と同じように、晩ばんの食事をたらふく飲み食いしたあとで、今度は、金の卵を生むにわとりの代りに、金や銀のお宝のたくさんつまつた袋を出させて、それをざあ

つとテーブルの上に開けて、一枚一枚かぞえてみて、それから、おはじきでもして遊ぶように、それをチャラチャラいわせて、さんざん遊んでいましたが、ひととおり楽しむと、また袋の中に入れて、ひもを堅くしめました。そして、天井に響くほどの大あくびを一つしてから、そのままぐうぐう大いびきで寝てしまいました。

そこで、今度も、ジャックは、そろりそろり、あかがねの箱からはい出して、金と銀のお宝の一杯つまった袋を、両方の腕に、しっかりとかかえるが早いのか、さっさと逃げ出しに行きました。ところが、この袋の番人に、一匹の小犬がつけてあったので、そいつが、とたんに、きんきん吠え出しました。

ジャックは、今度こそだめだと思いましたが、それでも、大男は、とても死んだようによく寝入っていて、目を覚ましませんでした。ジャックは夢中で、あとをも見ずにどんどん、どんどん、かけて行って、とうとう豆の木のはしごに行きつきました。

さて、にわとりと違って、今度は重たい金と銀の袋を運ぶのに、骨が折れました。それでも我慢して、うんすら、うんすら、二日がかりで、豆の木のはしごを、ジャックはおりに来ました。——やつとこさ、うちまで辿り着くと、お母さんは、ジャックがいなくなつたので、すっかり、がっかりして、ひどい病人になって、戸を締めて寝ていました。それでも、無事なジャックの顔を見ると、まるで死んだ人が生きかえつたようになって、それからずんずんよくなって、やがて、しゃんしゃん歩き出しました。その上、お金がたくさまできたと聞いて、よけい元気になりました。

#### 七、三度、大きな豆の木を登る。

こうして、また、しばらくの間、ジャックは、家でおとなしくしていましたが、そうするうちに、だんだんとからだじゅうがむずむずして来ました。もうまた天上に行きたくなって、毎日、豆の木のはしごばかり眺めていました。すると、それが気になって、気になって、気がふさいで来ました。——そこで、ジャックは、ある日、また、そつと豆の木のはしごをつたわって登りました。今度も顔から姿からすっかりほかの子供になって行きましたから、鬼のお上さんは、また、だまされて中に入れました。そして、大男が帰ると、あわてて、お釜の中に隠してくれました。

鬼の大男は、部屋の中じゅう嗅ぎまわって、ふん、ふん、人臭いぞと言いました。そして、今度は、何でも探し出してやるといって、部屋の中のもの、一つ一つ見てまわりました。そして、最後に、ジャックの隠れているお釜のふたに手をかけました。ジャックは、ああ、今度こそダメだと思つて、震えていますと、それこそ妖女が守つていてくれるのでしょうか、大男は、ふと気がかわつて、それから炉端に座り込んで、「……まあいいや。腹が空いた。晩飯にしようよ」と言うのでした。

さて、晩飯がすむと、大男はお上さんに、「……にわとりはとられる、金の袋、銀の袋は盗まれる、仕方がない、今夜はハープでも鳴らすかな」と言いました。——ジャックが、そつとお釜のふたを開けてのぞいて見ますと、玉で飾つた、見事なハープのたて琴が目に入りました。……鬼の大男は、ハープをテーブルの上のせて、「鳴り出せ」と言いました。すると、ハープは、ひとりでに鳴り出しました。しかもその音の美しいことといったら、どんな楽器だって、とてもこれだけの音には響かないほどでしたから、ジャックは、

金の卵のにわとりよりも、金と銀との一杯つまった袋よりも、もつともつと、このハーブが欲しくなりました。

そうするうちに、ハーブの音楽を楽しい子守歌にして、さすがの鬼もいい心持ちに眠ってしまいました。ジャックは、しめたと思つて、そつとお釜かまの中から抜け出すと、すばやくハーブをかかえて逃げ出しました。ところが、あいにく、このハーブには、魔法が仕かけてあつて、とたんに大きな声で、「……起きろよ、旦那さん、起きろよ、旦那さん」と、怒鳴り出したのでした。これで、大男も目を覚ましました。むうんと立ち上がつてみると、ちつぽけな小僧が、大きなハーブをやつこらさとかかえて、逃げて行くのが見えました。

「……待て小僧、きさま、にわつとりを盗んで、金の袋、銀の袋を盗んで、今度はハーブまで盗むのかあ」と、大男はわめきながら、あとを追っかけました。ジャックは、「……つかまるならつかまえてみる」と、負けずに怒鳴りながら、それでも一生懸命に駆けました。大男も、お酒に酔つた足を踏みしめ踏みしめ、よたよた走りました。その間、ハーブは、たえず、からんからん、鳴り続けていました。

さて、やつとこさ、豆の木のはしごの所までくると、ジャックは、ハーブに向かつて、「……もうやめよ」と言うと、それなりハーブは黙りました。ジャックは、ハーブをかかえて、豆の木のはしごを降り始めました。はるか目の下に、お母さんが、小屋の前に立つて、泣き張らした目で、空を見つめていました。——そうこうするうち、大男が追つついてきて、もう片足、はしごにかけました。「……お母さん、お泣きでない」と、ジャックは、上から精一杯に呼びました。「……それよか、斧おのを持って来ておくれ。早く、早く」と大声で叫び、もう一分も待たれません。大男はみしり、みしり、はしごをつたわつて降りて来ます。ジャックは、気が気ではありません、身の軽いのを幸いに、ハーブをかかえたなり、はしごの途とちゆう中、つばめのような早業で、くるりとひっくりかえつて、高い上から飛び降りました。そこへお母さんが、斧おのを持って駆けつけたので、ジャックは斧をふるつて、いきなり、はしごの根元から、ぶつくり切り離しました。その時、まだ、はしごの中ほどを降りかけていた大男が、切れた豆のつるを掴つかんだまま、大きな体の重みで、ずしんと、それこそ地面がめり込むような音を立てて、落ちてきました。そして、それつきり目をまわして死んでしまいました。

八、美しい女の人……

ちようど、その時、いつぞや、初めてジャックに会つて、道を教えてくれた妖女が、今度はまるで違つて、目の覚めるような美しい女の人の姿になつて、またそこへ出て来ました。——きらびやかに品のいい貴婦人きふじんのような身なりをして、白い杖つえを手てに持っていました。杖つえの頭あたまには、純金じゆんきんの孔雀くわんかくを止とまらせていました。そして、不思議な豆がジャックの手に入るようになったのも、ジャックを試たすために、自分が計はからつてしたことだと言いうのでした。そして、「……あの時、豆のはしごをみて、すぐにとそのままどこまでも登つて行こうという気きを起おこしたのが、そもそもジャックの運うんの開ひけるはじめだったので。あれを、ただぼんやり不思議だなと思つて眺ながめたなりで過ぎてしまえば、取り替かえつこした牝牛めうしは、たとえ手に戻もどることがあるにしても、あなたたちは、相変あひわらず貧乏ひんぱふで暮くらさなければならなかつたのです。だから、豆の木のはしごを登のぼつたのが、とりもなおさず、

幸運のはしごを登ったわけなのだよ」と、こよう妖女は、言い聞かせて、ジャックにも、ジヤックのお母さんにも別れを告げて、帰って行きました。(完)

\*

\*



ヘンゼルとグレーテル

## ヘンゼルとグレーテル

### 一、貧しい木こり一家

大きな森の近くに小屋を持って、貧しい木こりの男が、おかみさんと二人の子供とで暮らしていました。二人の子供のうち、男の子は、ヘンゼル、女の子は、グレーテルと言いました。もともと、人間らしいものをろくすっぽ口にすることもできなかったのですが、ある年、国じゅうが大へんな飢饉となり、それこそ、その日その日のパンすら口に入らなくなりました。木こりは、夜、寝床に入ったものの、このち、どうして暮らすか考えると、心配で心配で、ごろごろ寝返りばかりして、ためいきをつき、こう言うのでした。

「……なあ、おれたち、これからどうなると言うんだ。かわいそうに、子供らをどうやって食わしたらいいのだ、なにしろ、肝心の養ってやっているおれたち二人の食うものすらない始末だからな」と言うとおかみさんは、「……だから、お前さん、いつそこうしようじゃないか」と、言うのでした。それは、「……あしたの朝、早くに、子供たちを連れ出して、森の奥の、いちばん木が生い繁っている所まで行くのさ。そこで、たき火をして、めいめい一かけらずつパンをあてがって置いて、それから、わたしたちは、仕事の方へと抜けて行って、二人をそっくり森の中に置いてくるのさ。子供らに帰り道が見つかりっこないから、それでやつかいばらいができるじゃないか」と言うのでした。

それを聞いて、木こりは、「……そりゃあ、おめえ、いけねえよ」と、言いました。「……そんなこたあ、おれにはできねえよ。子供らを森中へ置き去りにするなんて、どうしたって、そんな考えになれるものかな。そんなことしたら、子供らは、すぐにも森の獣たちが出てきて、ずたずたに八つ裂きにされてしまうだよ」と言うのでした。すると、おかみさんは、「……やれやれ、お前さん、いい馬鹿だよ」と言いながら、「……そんなことを言っていたら、わたしたち四人が四人、そろって飢え死にでみな死んでしまうよ。あとは棺桶の板を削ってもらうだけが、仕事になるよ」と、こうおかみさんは言って、それから、のべつまくし立てて、否応なしに、亭主をうんと言わせてしまいました。が、亭主は、「……だが、どう考えても、子供たちがかわいそうだなあ」と、呟くのでした。

### 二、親の話を聞いてしまう

一方、二人の子供たちも、お腹がすいて、よく寝つけませんでしたから、まま母が、おとうさんに向かって言っていることを、そっくり聞いていました。妹のグレーテルは、涙を出して、しくんしくんやりながら、兄さんのヘンゼルに向かって、「……まあどうしましよう、あたしたち、もうだめね」と言うのと、「……しッ、黙ってグレーテル」と、ヘンゼルは言い、「……心配しないで、だいじょうぶ、ぼくがきつとうまくやってみせるから」と、こう妹をなだめておいて、やがて、親たちが寝静まると、ヘンゼルはそうつと起き出して、上着をひっかけ、そして、表の戸の下（くぐり戸）だけ開けて、こっそり外へ出ました。ちようどお月さまが、昼のように明るく照っていて、家の前にいてある白い小砂利が、それこそ銀貨のように、きらきらしていました。ヘンゼルは、かがんで、その小砂利を、上着のかくしの中にいっぱいつまるだけ詰めました。それから、そつとまた、もどつ

て来て、妹のグレーテルに、「……いいから安心して、ゆっくりおやすみ。神さまがついてくださるよ」と、言い聞かせて、自分もまた、床にもぐり込みました。

### 三、朝、家族四人で森へ行く

夜が明けると、まだお日様の上がらないうちから、もうさっそく、おかみさんは起きて来て、二人を起こしました。「……さあ、起きないか、のらくら者だよ。起きて森へ行つて、たきぎを拾つて来るのだよ」と、こう言つて、おかみさんは、子供たちめいめいに、ひと切れずつパンを渡して、「……さあ、これがお昼だよ。お昼にならないうち、食べてしまうのではないよ。もうあとは何にももらえないからね」と、言うのでした。

妹のグレーテルは、パンを二つともそっくり前掛けの下にしまいました。兄のヘンゼルは、かくしにいっぱい小石を入れていましたからね。そのあとで、親子四人そろつて森へ出かけました。しばらく行くと、ヘンゼルがふと立ちどまつて、首をのぼして、うちのほうを振り返りました。しかも、そんなことを何べんも何べんもやりました。おとうさんがそこで言いました。「……おい、ヘンゼル、何をそんなに立ちどまつて見ているんだ。うっかりしないで、足元に気をつけるんだ」と言つと、「……なあに、おとうさん」と、ヘンゼルは言い、「……ぼくの見ているのはね、あれさ。ほら、あすこの屋根の上に、ぼくの白猫が上がつていて、あばよしているから」だと応えると、おかみさんは、「……馬鹿だね、あれがお前の小猫なもんか、ありやあ、煙出しに日があたっているだけじゃないか」と言うのでした。でも、ヘンゼルは、小猫なんか見ているのではなく、ほんとうはその間に、例の白い小砂利をせっせとかくしから出しては、道に落し落ししていたのです。

### 四、森の真ん中まで来ると……

さて、森の真ん中まで来た時、おとうさんは、「……さあ、子供たち、たきつけの木を拾つておいで。みんな寒いといけない。おとうさんがたき火をつけてやるよ」と言いました。そこで、ヘンゼルとグレーテルは、細い木の枝を運んで来て、そこに山と積み上げました。その細い木の枝の山に火がついて、ぱあっと高く、ほのおが燃え上がると、おかみさんが言いました。「……さあ、子供たち、一人は、たき火のそばで暖まつて、わたしたちが森で木を切つて来るあいだ、おとなしく待つているんだよ。仕事がすめば、戻つてきて、一緒に連れて帰るからね」と言うのでした。ヘンゼルとグレーテルは、そこで、たき火にあたっていました。お昼になると、めいめいあてがわれた、パンの小さなひと切れを出して食べました。さて、その間も、じじゅう木を切る斧の音がしていましたから、おとうさんは、すぐ近くで仕事をしていることとばかり思っていました。でも、それは斧の音ではなくて、おとうさんが一本の枯れ木に、枝をいらい付けておいたのが、風でゆすられて、あつちへぶつかり、こつちへぶつかりしていたのです。こんなふうにして、二人は、いつまでもおとなしく据わつて待つているうち、ついくたびれて、両方の目がとろんとしてきて、それからぐつすり寝てしまいました。それで、やっと目がさめてみると、もうすっかり日は暮れて、夜になっていました。妹のグレーテルは、泣き出してしまいました。

さて、そのグレーテルは、「……まあ、わたしたち、どうしたら森の外へ出られるでし

よう」と言うので、兄のヘンゼルは、妹のグレーテルをなだめて、「……なあに、しばらくお待ち、お月さまが出てくるからね。そうすれば、すぐに路が見つかるよ」と、言いました。——やがて、まんまるなお月さまが、高々と登りました。そこで、ヘンゼルは小さい妹の手を引いて、小砂利を落とした跡を、辿り辿り行きました。小砂利は、まるで「鑄き立て」（それは「造り立て」の「銀貨」みたいにぴかぴか光って、路しるべをしてくれました。一晩中、歩き通しに歩いて、もう夜のしらしら明ける頃に、ふたりはやっとうさんの家に帰って来ました。二人が表をコツコツと叩くと、おかみさんが戸を開けて出てきました。そして、ヘンゼルとグレーテルの立っているのを見ると、「……このろくでなしめら、いつまで森中で寝こけていたんだい。お前たち、もう家に帰るのがいやになっただと思っていたよ」と、言いました。一方、おとうさんの方は、でも、ああして子供たち二人きりにして置きざりにして来たものの、心配で心配でならなかったところでしたから、よく帰って来た、と、言ってお喜びました。

##### 五、生活がさらに困窮してしまう

それから、あまり経たないうちに、また、八方ふさがりになりました。子供たちが聞いていると、夜遅く、寝ながらおかみさんが、おとうさんに向かって、「……さあ、いよいよ何もかも食べ尽くしてしまつたよ。天にも地にもパンが半きれ、それを食べてしまえば、もうおしまいさ。こうなりやどうしたって、子供らを追い出すほかはないよ。今度は森のもつと奥まで連れ込んで、もうとても帰り道のわからないようにしなきゃだめさ。どうしたって、ほかにわたしたち助かりようがないからね」と、こんなことを言われて、亭主は、すっかりいやな気持ちになり、そんなことをするくらいなら、自分の分のいちばんしまいに食べるやつを、子供たちに分けてやったほうがましだ」と、考えました。

それでも、おかみさんは、亭主の言うことにはまるで耳をかさず、あべこべに叱りつけたり、悪態をついたりしたのでありますが、それは、だれでも、いったん「A」と言ってしまうば、あとは「B」と続けなければならなくなるので、この亭主も、一度おかみさんの言うままになつたからは、今度もその通りにしなければならなくなりました。

ところで、子供たちはまだ目が開いていて、この話を残らず聞いていました。そこで、大人たちの寝てしまうのを待ちかねて、ヘンゼルは起き上がると、外へと飛び出して、この前のように小砂利を拾いに行こうとしました。ところが、今度は、おかみさんが戸にしっかりと錠を下ろしてしまつたので、ヘンゼルは、外に出ることが出来ませんでした。それでも、ヘンゼルは、「……泣くのじゃないよ、グレーテル、いいから、安心してお休み。神さまがきつと助けてくださるから」と言ってお、小さい妹をなぐさめるのでした。

##### 六、家族四人再び森へ行く

あくる日は、朝早くから、もうおかみさんはやって来て、子供たちを寢床から連れ出しました。そして、二人の子供たちは、めいめいパンのかけらを一つずつもらいましたが、それは、前よりよほど小さいものでした。それをヘンゼルは、森へ行く道、かくしの中でぼろぼろに崩しました。そして、おりおり立ち止まっては、その崩したパン屑を地面に落

しました。すると、「……おい、ヘンゼル、なんだって立ちどまって、きよろきよろ見て  
いるんだい」、「……さっさと歩くんだよ」と、おとうさんが言いました。そこで、ヘン  
ゼルは、「……ぼくはね、ぼくのこぼと小鳩を見ているんだよ。ほら、屋根の上に止まって、ぼ  
くにさよならしているじゃないか」と、言うのでした。すると、「ばっつ!」と、おかみ  
さんは、また言いました。「……あれがなんで鳩はとなもんか。あれは朝日が煙出しの上でき  
らきらしているだけだよ」と言うのでした。ヘンゼルは、それにはかまわず、パン屑くずを道  
の上に落し落しして、残らずなくしてしまいました。

おかみさんは、子供たちを森のもつともつと深く、生まれてまだ来たこともない奥まで  
引っぱって行きました。そこで、今度も、またじゃんじゃんたき火をしました。そして、  
おかみさんは、「……さあ、子供たち、二人ともそこにじつと居いればいいのだよ。くたび  
れたら少し寝てもかまわないよ。わたしたちは、森で木を切つて来て、夕方、仕事がおし  
まいになれば、戻つてきて、一緒にうちに連れて帰るからね」と、言うのでした。

さて、お昼になると、妹のグレーテルは、自分のパンを兄のヘンゼルと二人で分けて食  
べました。兄のヘンゼルのパンは、道にまいて来てしまいましたからね。パンを食べてし  
まうと、二人は眠りました。そのうちに晩も過ぎましたが、かわいそうな子供たちのとこ  
ろへ、誰も来るものではありません。二人がやつと目を開あけた時には、もう真つ暗な夜にな  
っていました。兄のヘンゼルは、小さい妹をいたわりながら、「……グレーテル、まあ待  
つておいでよ、お月さまが出るまでね。お月さまが出りゃあ、こぼしておいたパン屑くずも見  
えるし、また、それを探さがして行けば、うちへ帰れるんだよ」と、言うのでした。

お月さまが上がったので、二人は出かけました。けれど、パン屑くずは、もうどこにも見あ  
たりません。それは、森や野を飛びまわっている何千とも知れない鳥たちが、みんなつづ  
いてもつづ行ってしまったのです。それでも、兄のヘンゼルは、妹のグレーテルに、「……  
なあにそのうち、道が見つかるよ」と、言っていました。やはり、見つかりませんで  
した。夜中じゆう歩き通して、あくる日も朝から晩まで歩きました。それでも、森の外に  
出ることが出来ませんでした。それに何よりお腹なかがすいてたまりませんでした。地面に出  
ていた「くさいちご」の実を、ほんの二つ三つ口にしただけでしたものでね。それで、もう  
くたびれきつて、どうにも足が進まなくなつたので、一本の木の下のごろりとなると、そ  
のままぐっすり寝込んでしまいました。

#### 七、やがて、小さな家が見えて来る

そんなことで、二人はおとうさんの小屋を出てから、もう三日めの朝になりました。二  
人は、また、とぼとぼ歩き出しましたが、行けば行くほど森は深くなるばかりであり、こ  
こらで誰か助けに来てくれなかつたら、二人はこれきり弱よわりきつて、倒たふれるほかないとこ  
ろでした。——すると、ちようどお昼ごろでした。雪のように白いきれいな鳥が、一本の  
木の枝にとまって、とてもいい声で歌っていました。あまりいい声なので、二人はつい立  
ちどまって、うっとり聞いていました。そのうち、歌をやめて小鳥は羽ばたきをする、と、  
二人の行くほうへ、飛び立って行きました。二人もその鳥の行く方へついて行きました。  
すると、小さな家の前に出ました。その小さな家の屋根に小鳥は止まりました。二人が小  
さな家のすぐそばまで行ってみると、まあこの小さな家は、パンでできていて、屋根はお

菓子でふいてありました。おまけに、窓はびかびかするお砂糖でした。「……さあ、ぼくたち、あすこに向かつて行こう」と、ヘンゼルが言いました。「……けっこうなお昼だ。かまうものか、たんとごちそうになろうよ。ぼくは、屋根をひとかけらかじるよ。グレーテル、お前は、窓のを食べるのいいや。ありやあ、甘いよ」と、言うのです。

兄のヘンゼルは、うんと高く手をのばして、屋根を少し欠いて、どんな味がするか、ためしてみました。すると、妹のグレーテルも、窓ガラスにからだを寄せて、ぼりぼりかじりかけました。その時、お部屋の中から、やさしい声がしました。「……ぼりぼり、がりがり、わたしのお家をかじるのは、だれだね？」と言いました。子供たちは、その時、「……かぜ、かぜ、天の子」と応じて、遠慮会釈もなく、食べ続けていました。兄のヘンゼルは、屋根がとても美味しかったので、大きなやつを、一枚、そっくりめくって持って来ました。妹のグレーテルも、まるい窓ガラスをそっくり外して、その前に据わり込んで、ゆつくりと食べ始めました。その時、いきなり戸が開いて、ひどく年老いたばあさんが、しゅもく杖にすがって、よちよち出て来ました。ヘンゼルもグレーテルも、これにはしたたか驚いて、せつかく両手に抱えたものを、ぼろりと下に落してしまいました。でも、ばあさんは、頭をゆすぶりゆすぶり、こう言いました。「……やれやれ、かわいい子供たちや、誰に連れられてここまで来たかの。さあさあ、入って、ゆつくりお休み、何にもされやせんからの」と、こう言って、ばあさんは二人の手をつかまえて、小さな家の中へと連れ込みました。

#### 八、魔女の家の様子

さて、家の中に入ると、牛乳だの、砂糖のかかった焼きまんじゅうだの、りんごだの、くるみだの、おいしそうなごちそうが、テーブルに並んでいました。そのごちそうのあとでは、かわいいきれいなベッド二つに、白い布がかかっていました。ヘンゼルとグレーテルは、その中にごろりとなつて、天国にでも来ているような気がしていました。

このばあさんは、ほんのうわべだけ、いかにも親切そうに見せていましたが、ほんとうは、悪い魔女であり、子供たちの来るのを知って、パンのお家なんかこしらえて、だましておびき寄せたのです。ですから、子供が一人、手のうちに入ったが最後、さっそく殺して、ぐつぐつ煮て、それをむしゃむしゃ食べる、それが「魔女」にとつての何よりうれしい「お祝いの日」になるといわけなのです。魔女というのは、赤い目をしていて、遠くはよく見えないのですが、そのかわり、獣のように鼻がよく利くので、人間どもが近寄って来ると、そのにおいでそれが分かるのです。それで、ヘンゼルとグレーテルが近くへやって来ると、ばあさんは、さっそくたちの悪い笑い方をして、「……さあて、一度つかまえたからにや、こつちのものさ、もう逃げようたつて、そう簡単に逃がすものじやないよ」と、いかにも悪賢そうに言うのです。……

その翌る日、朝早く、子供たちがまだ目を覚まさないうちから、ばあさんは起き出して来て、二人ともそれはもう真っ赤にふくれた頬つぺたをして、すやすやといかにも可愛らしい姿で休んでいるところへ来て、「……こいつら、とんだごちそうだよ」と、つぶやきました。そこで、ばあさんは、やせ枯れた手でヘンゼルをつかむと、そのまま小さな家畜小屋へ連れて行って、ぴつしやりと格子戸を閉めてしまいました。ですからヘンゼルは、

中でいくら何がかんだと喚わめいてみせても何の役にも立ちません。それから、ばあさんは、またグレーテルの所へと行って、むりに揺すぶり起こしました。そうして、「……この怠たいけ者、さあ起きて、水を汲くんで来て、兄にいさんに何でもおいしいものをこしらえてやるんだ。外の家畜小屋に入れてあるからの、せいぜいあぶら太りにふとらせなきゃ。だいぶ、あぶらの乗ったところで、おばあさんが食べるのだから」と、喚わめきました。

これを聞いて、妹のグレーテルは、わあっと激しく泣き出しました。けれども、何をしたら何の役にもたちません。妹のグレーテルは、このたちの悪い魔女の言いなりに何でもしなければなりません。こんな次第で、気の毒に、食べられる兄のヘンゼルには、いちばん上等なお料理が与えられて、そのかわり、妹のグレーテルには、ザリガニの甲羅こうらが渡ったばかりでした。毎朝、毎朝、ばあさんは家畜小屋へ出かけて行って、「……どうだな、ヘンゼル、指を出してお見せよ。そろそろあぶらが乗って来たかどうか、見てやるから」と、喚わめきました。すると、兄のヘンゼルは、食べ余しのほそっこい骨を、一本かわりに出しました。ところで、ばあさんは目がかすんでいるものですから、その見分けがつかず、それをヘンゼルの指だと思って、どうしてヘンゼルにあぶらが乗ってこないか、不思議でなりませんでした。

#### 九、魔女はついに二人を……

さて、それから、かれこれ一か月経たちました。が、相変わらずヘンゼルは、痩せこけたままでした。それで、ばあさんも、とうとうしびれをきらして、もうこの上待ちきれないと思い、「……やいやい、グレーテル」と、ばあさんは妹の子に向かってわめき立てました。「……さあ、さっさと行って、水を汲くんでくるのだ。ヘンゼルの小僧め、もう太つていようが、痩せていようが、何がだつて、明日あしたこそ、あいつをぶち殺して、煮て食くちまうんだからな」と、言うのでした。

やれやれ、どうしましょう。かわいそうに、この妹の子は、むりやり水を汲くまされながら、どんなに激しく泣きじゃくったことでしょう。「……神さま、どうぞお助けくださいまし」と、この子は叫なび声を上げました。「……いっそ森の中で、猛獣に喰くわれたほうが、よかつたわ。それだと、かえって二人一緒に死ねたのだから」と言うのと、「……やかましいぞ、このがきやあ」と、ばあさんは言いました。「……泣いたつて喚わめいたつて、何にもなりやあしないぞ」と、言うのでした。

翌ある日は、朝から、グレーテルは、外へひっぱり出されて、水のはいった大鍋おとなべをつるして、火をたき付けなければなりません。「……パンからさきに焼くんだ」と、ばあさんは言いました。「……パン焼きかまどはもう火が入っているし、ねり粉もこねてあるし」と、こう言つて、ばあさんは、かわいそうなグレーテルを、パン焼きかまどの方へ、ひどく突き飛ばしました。かまどからは、もうちよろちよる炎が赤い舌を出していました。「……中なかへ、這はいり込んでみなよ」と、魔女は言いました。「……火がよくまわっているか見るんだ。よければそろそろパンを入れるからな」と、……

これで、若もしもグレーテルが中に入れば、ばあさんは、すぐにかまどのふたを閉めてしまふつもりでした。そうすれば、グレーテルは、なかでまる焼きになるに決まっています。そうしたら、ばあさんは、そのグレーテルをむしやむしや食べてしまふつもりだったので

す。ところが、グレーテルは、いち早く、ばあさんの企んでいることに気づいて、そこで、「……あたし、わからないわ、どうしたらいいんだか。中へ入るって、どういうふうにするの」と、聞くのでした。すると、「……ばあさん、このくそが、ちよう」と、ばあさんは言いました。「……口がこんなに大きいんだよ、見てみなよ、この通り、おばあさんだつてそっくり入れらあな」と、こう言い言い、やつこら這うように歩いて来て、パン焼きかまどの中に、首をつつ込みました。すると、ここぞと、グレーテルはひと突き、うしろからどんと突きました。そのはずみで、ばあさんは、かまどの中へ転げ込みました。すぐに鉄の戸をびしりと閉めて、かんぬきをかつてしまいました。「……うおッ、うおッ」と、ばあさんはとてもすごい声で吠えたけりましたが、グレーテルは構わず駆け出しました。こうして、罰あたりな魔女は、否も応もなくあわれな様で焼け死んでしまいました。（ちなみに、魔女は火あぶりにするのがいちばんとされているのである。）

#### 十、結末は……

グレーテルは、まっしぐらにヘンゼルのいる所へ駆け出して行きました。そして、「……ヘンゼル兄さん、あたしたち助かったのよ。魔女のばあさんは死んでしまったわ」と叫びながら、家畜小屋の戸を開けました。戸が開くと、途端に、ヘンゼルが鳥が籠から飛び出るように、ばあつと飛び出して来ました。まあ、二人は、その時、どんなにうれしがって、首つ玉にかじりついて、ぐるぐるまわりして、そして接吻しあつたことでしょう。こうなれば、もう何にもこわいものななくなったのですから。二人は魔女のうちの中に、ずんずん入って行きました。すると、あつちのすみにも、こつちのすみにも、真珠や宝石のつめ込めであるながもちがいくつも置いてありました。「……こりや、小砂利よりずつとまじだよ」と、兄のヘンゼルは言つて、かくしの中に入れてくれるだけ詰め込みました。すると、妹のグレーテルも、「……あたしも、うちへおみやげに持つていくわ」と言つて、前掛か一杯にしました。「……さあ、もうそろそろ出かけよう」と、ヘンゼルは言い、「……何しろ魔女の森から抜け出さなければならぬのだから」と言うのでした。

それで、二三時間歩いて行くうちに、大きな川の所へ出ました。「……これじゃあ渡れやしないや」と、兄のヘンゼルは言いました。「……ほんとうの橋どころか、丸木橋ひとつ見えやしないよ」と言うのでした。すると、「……ここいらは、ちつぽけなお船も通らないのね」と、妹のグレーテルも言いました。でも、「……あすこに、白いカモが一羽泳いでいるわね。きつと頼んだら渡してくれるわよ」と言い、そこで、妹のグレーテルは、声を挙げて呼びました。「……カモちゃん カモちゃん 小ガモちゃん、ここに居るのは、グレーテルとヘンゼル ここまで来たけど、橋もなければ 丸木橋ひとつないの。おまえの白いお背中に乗せて、渡してくださいな」と、頼みました。

すると、カモは、さつそく来てくれました。そこで、兄のヘンゼルがまず乗つて、小さい妹と一緒に乗りと言いました。けれども、妹のグレーテルは、「……いいえ」と答えて、「……そんなに乗つては、カモちゃん、とても重いでしょう。別々に連れてつてもらいましょ」と言うのでした。その通り、この親切な鳥（カモ）はしてくれました。それで、二人無事に向こう岸に渡りました。それから、少しまた歩くうち、だんだんだんだん森がお馴染みの景色になって来ました。そして、とうとう遠くの方に、おとうさんの小屋を見



つけました。さあ、二人は一目散に駆け出ししました。そして、ぼんとお部屋の中に飛び込んで、おとうさんの首根っこにかじりつきました。

この木こりの男は、子供たちを森の中に置き去りにして来てからというものの、ただの一時でも、笑える時がなかったのです。それから、おかみさんは、もう死んでいたのです。そして、妹のグレーテルが前掛けを振うと、真珠や宝石がお部屋じゅう転がり出ました。また、兄のヘンゼルがかくしに片手をつっ込んで、何度も何度もつかみ出しては、そこにばらまきました。——さて、こんなことで、様々な心配や苦労などは、みなきれいにふき飛んでしまい、親子三人それぞれ嬉しうれいことづくめで、一緒に仲良く暮らしました。

わたしのお話は、これでおしまい。あすこにちよろちよろしているのは、二十日鼠、どなたでもあれをつかまえたかたは、あれで大きな大きな毛皮の頭巾をこしらえて、ご自分のになさいまし……。」(完)

\*

\*

「参考文献」

- ※底本「赤ずきん」楠山正雄訳（「青空文庫」）
- ※底本「ジャックと豆の木」楠山正雄訳（「青空文庫」）
- ※底本「ヘンゼルとグレーテル」楠山正雄訳（「青空文庫」）